

# 創建時の風情生かす

古民家や蔵などを宿泊施設に改修し、町並みの保存継承と滞在型観光振興の双方を実現する。その目的のため、ホテルへの改修の鉄則はこう定められた。「耐震強化など大がかりな内部工事をするが、外観は創建時を復元し、優美な指し物や天井など佐原の意匠を表すものはそのまま残す」

たとえばカフェ棟「GEIS HO」は東日本大震災の地盤沈下で6センチ傾いたという。地盤強化剤を注入するなど大工事をしたが、その外観は1855年に建設された当時の威容のまま。創建時の趣や風情を残して再生すれば独特の快適さを生む

くつろぎの宿

## 歴史を紹介し付加価値

が、短所も残る。宿泊棟は、職人手作りの檜風呂など高品質な一流の調度品をそろえている。

だが、都心にある同程度の宿泊料のホテルなど比べれば建物の構造上、断熱性や気密性などは劣ってしまう。それでも「滞在したい」と思ってもらうには、どうしたらいいのか。

宿泊・飲食運営を担うパリエー・マネジメント店舗統括部の吉田寛さんが言う。

「お越しになる前やチェックインの際、建物を残して歴史ある時間の中で、ゆったりと滞在いただくのが当ホテルのおもてなしであることや、お部屋の歴史や造りなどを説明します」つまりホテル価値のプレゼンテーションだ。吉田さんは街のコンシェルジュでもある。

「旅の目的やニーズに合わせて、お店や特産物、観光スポットな

どの紹介もしています」その努力の積み重ねが、滞在価値を上げ、宿のファンだけでなく街のファンも生み出すと信じている。実はどの客室にもテレビと時計がない。「日常を忘れ、時間がゆっくと流れる佐原で、ふだんできないご家族との対話を楽しんで、しっとりとお酒を飲んだりして、時間を忘れるような場を提供したいからです」

それが、このホテルに泊まる醍醐味でもある。【近藤浩之】



●宿泊棟「GOKO」の一室。和紙とお香を商っていた商家の裏手にある資材蔵を改修した。入り口には蔵の造作がそのままある。ホテルの棟名はすべて、香取市の市花である花菖蒲(はなしょうぶ)の名を付している。「GOKO」は江戸系花菖蒲「五湖の遊」から名付けた。近藤浩之の撮影。●「GOKO」へと改修作業する様子。中央右にあるのが資材蔵。2018年9月25日撮影、佐原信用金庫提供

